

## 全体研究合宿

日 時：2014年8月31日（日）～9月1日（月）

場 所：パレスホテル箱根

### 【プログラム】

\*一日目 13：00～18：00\*

13：00～14：40 研究報告

13：00～13：50 土屋貴裕（慶應義塾大学院）

「中国の党軍関係と軍中党組織制度：組織論的アプローチによる一考察」

13：50～14：40 上野正弥（慶應義塾大学院）

「中国共産党の宗教管理政策に関する研究 1990年代を中心に」

15：00～15：50 許 元寧（慶應義塾大学院）

「国際海洋秩序の変動と日中関係 1970年代の東シナ海大陸棚問題を中心に」

15：50～16：40 有澤雄毅（慶應義塾大学院）

「オーバーラップする環境規制：

中国におけるディーゼル自動車規制政策をめぐる対立、1998-2000」

16：40～18：00 全体会議

\*二日目 9：00～12：00\*

9：00～10：40 研究紹介

9：00～9：50 鄭 浩瀾（フェリス女学院大学）

「中国子供史の研究について：政治の視点から」

9：50～10：40 王 鍵（中国社会科学院）

「21世紀における兩岸関係の現状と課題」

10：40～12：00 グループ研究会

### 【概要】

2014年度の研究合宿をパレスホテル箱根で実施した。一日目は若手の育成を主とした。博士論文を完成したばかりの若手研究者や博士課程に在籍する大学院生を中心に研究報告を行った。それぞれのテーマは大きく異なるが、博士論文の問題意識の設定や、研究方法の妥当性など共通する問題が指摘された上で、関係する資料の所在やフィールドワークのやり方など貴重な情報とアドバイスがあり、若手研究者にとって大きな刺激となった。研究報告会の後に全体会議が開かれ、内政研究グループと外交研究グループの代表者がまずそれぞれの活動について報告した。その後高橋センター長から昨年度の予算使用報告、センターの資料収集と使用について説明され、今後の活動についての構想も紹介された。

二日目の研究紹介では、まず鄭氏から中国の子供史研究の流れと日本のそれとを比較しながらの紹介があった。「こども」の概念が近代において国家権力と密接な関係のなかで形成されたことは日中双方にとっていえることである。しかし近代化、改革、日中戦争といった文脈を抱える中国では、児童に対する国民教育が共産党による児童動員にまで至った。そのプロセスの中に、未だに究明されていない問題が多く存在し、今後は政治社会史として有望な研究分野であると指摘された。その後王氏は兩岸関係の歴史と最近の動きを紹介した。習近平政権では馬英九に対する不評の定着や台湾社会の変化が強調された。同時に、福建省を基地に兩岸経済関係の一体化がさらに推進されることも紹介された。これらの矛盾は現段階の大陸の政策選択の窮地をも示している。多くの参加者がこの動きに高い関心を示し、議論が白熱した。最後には、内政研究グループと外交研究グループに分けて、それぞれ今後の活動予定と執筆計画について議論をした。